



1988-10

No.241

【表紙】

江戸小紋 菊格子
小宮康孝
1985年作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

特集：オーケストラ

今日のオーケストラと その歴史	藤田 由之	4
音の蔭	岩城 宏之	8
オーケストラ・ディレクターの 泣きどころ	長谷 恭男	11
日本のオーケストラ 世界のオーケストラ	文化庁芸術課	14

—ぶんかブンカ—

ウィーンでのオペラ『椿姫』に めぐり会って	山崎伸子	18
—在外研修員として得たもの—		

—都道府県のページ—

〔我が県の文化行政⑩〕 富山からの文化メッセージ	富山県	19
〔特色ある文化活動⑩〕 世界へむけての挑戦	湯布院映画祭	22

—文化庁だより—

〔報告〕 中国帰国者に対する日本語指導者研修会及び 日本語指導研究協議会、日本語教育研究協議 会の開催	24
〔文化庁ニュース〕 文化庁の昭和64年度概算要求まとまる	25
〔展覧会紹介〕 日本の考古学—その歩みと成果—	28
幾内と東国—埋もれた律令国家—	28
現代イギリスの工芸	29
日本のアニメーション	29

- 文化庁行事報告及び予定 30
- 国立劇場ニュース 31

世界へむけての挑戦

湯布院映画祭(大分県)

湯布院映画祭も今年で十三回目を迎える。

「映画館一つない町、しかしそこにも映画があつた」をキャッチフレーズに始まった映画祭。おそらく全国でも最初の無謀なかつ果敢な試みであったことを自負している。現在の映画祭の実行委員会の中核は、十三年のキャリアを誇る四十五人であることは間違いないのだが、それ以外の関係者は新しい仲間である。事務局長を務める筆者自身も若輩であり、映画祭が産声を上げた当時のことは直接は知らず、実行委員になって三度目の夏を迎えたところである。そんな経験浅い者が地方における湯布院映画祭の果たした役割などについて述べるのは、僭越ではあるが実行委員としてかかわった三年前から少しずつ変わっていった映画祭の動き、そして今湯布院映画祭が目指そうとするものについて紹介してみたいと思ふ。

三年前、冒頭に書いたキャッチフレーズをやめることにした。映画館が一館もないのに映画が見られて、映画が語れる。それも本物の監督や俳優を相手に、封切前の新作が。何

とも魅力的な世界である。しかし裏を返せば、十年間かかって映画館を一館もつくること

ができなかった自分たちであり、東京よりちよつと早く映画を見て喜んでる自分たちがないだけで、日本の映画はちよつともよくなるという現実がある。その上、自分たちが手弁当で、本当に一年間精根こめてつくり上げた映画祭が、たった四日間のドンチャン騒ぎのうち終ってしまうことの寂しさ。いろいろなイベントが陥る、いわゆるマンネリ化かもしれない。もちろん十年間の間、正しい目利きをもって、本当に優れた日本映画を上映してきたからこそ、多くの映画人やファンに愛され続けてきたという確信と誇りは失っていない。カッコよくいえば、成長への一過程、ステップだろうか。

大きなきっかけは、昨年の小川伸介監督との出会いだった。十二年間映画の祭を続けてきた我々の活動の向こう側に、十三年間村に暮らし、人と米との交わりや祝祭を克明に記録していた映画人がいたことは、大きなショックだった。そして映画祭で初めてのドキュ



モンズン 別冊

ダニエル・シュミット



湯布院

1988

ンヌに匹敵する映画祭で、四十年目を迎えるロカルノ映画祭に仲間として手紙を出した。するとスイスの山奥の人口一万五千(湯布院と変わらぬ大きさ)の町、ロカルノ映画祭の実行委員長からメッセージが届いた。これに勇気づけられ、映画祭の季節でもない十月に筆者は一人でロカルノを訪れ、幸運にも実行委員長のD・ストライフ氏に合うことができた。興奮のあまり何をしゃべったか詳細は忘れてしまったが、彼が湯布院映画祭のことを多くの人から聞き知っていたこと、そして東京映画祭よりも我々の映画祭を支持してくれたことは鮮烈な印象で残っている。次は小川監督の計らいもあって我々の実行委員長がベルリン映画祭へ出かけ、そのおみやげとして、何と世界的な映画監督D・シュミット氏を湯布院に迎えることができた。世界とのつ

ながりはヨーロッパだけでなく、アジアへも向けられた。フィリピンやタヒミック監督、マレーシアのテオ監督が自らの映画を持って湯布院にやってきた。テオ監督は十二回目を迎えた香港映画祭の実行委員でもある。こんなに世界が狭く感じられるとは思わなかった。すべてこの一年の出来事である。

我々の新たな出発が今切られようとしている。その確信がつかめたように思える。湯布院映画祭が十二年培ってきたものが、今花開こうとしているのか、あるいはこのまま枯れてしまうのか、その岐路に立たされているのかもしれない。D・シュミット氏は次のように語って励ましてくれた。「例えば東京映画祭とかベルリン映画祭のように大きくなってしまつと、せっかく世界中から素晴らしい映画監督たちがやってきても、論争したり、時にはケンカしたりすることはありません。小さな映画祭だからこそできるのです。」

(中略)湯布院映画祭には湯布院映画祭の顔というものがあつた。でも大きくなった映画祭にはありません。それがいざばん大事なことだと私は思います。」

最後に、湯布院映画祭の新しい未来へ向けて進む上で、唯一最大の課題点について苦言ではあるが、述べ

メンタリーが上映された。小川監督の映画「千年刻みの日時計」はもちろん、小川監督自身が我々に与えてくれたもの、それは勇気だつたように思える。あらゆる優れた映画は、たとえそれが悲劇であっても絶望は与えない。勇気と希望として可能性を示してくれる。そんな映画が今の自分たちにとって本当に大切だということを分かってくれた。

小川監督との出会いは世界との出会いでもあつた。世界で二番目に古く、ベルリン、カ

てみたい。なぜなら、それが我々だけの問題でなく、少なくとも地方において文化活動に携わるすべての人が抱えている問題だと思われるからだ。事務局長と湯布院映画祭の実行委員長は、ロカルノとベルリンそれぞれ同じ質問を受けた。「あなた方の資金、あるいは基金はどうなっているのですか」と。我々は「ほとんど自前で、自治体からはわずかな補助金しかもらっていない」と答えた。まちづくりなるものが盛んな日本では普め賛えてもらえるところであろうが、ヨーロッパの人は一様に怪訝な顔をする。その顔の裏には次のようなメッセージが隠されていた。「君たちの映画祭は、町や県、国にとってその程度の意味しかもたないのか。つまり、あまり重要なものでないんだね。町や国が誇りに思い、大事にしているものだったら、当然町や国が補助し、育てる、という常識がヨーロッパにはあるからだろう。それにしてもこの言葉は屈辱である。その時我々は世界を目標としていた。今は日本映画だけを対象としていたが、その思想と概念はインターナショナルでありたい。そして将来は、アジアの、そして世界の湯布院映画祭でありたい。かなり地道な作業ではあるが、ロカルノやベルリンで発見した勇気と自信が我々を支えている。そして何よりも今は、世界中に通じあえる仲間がいる。湯布院映画祭の新たな無謀で果敢な挑戦は、今始まったばかりである。」

(湯布院映画祭事務局長 清水聡二)

編 集 後 記

音楽を鑑賞していると、現代社会の喧騒からしばし解放される気がします。コマージュにせよカラオケにせよ、音楽に対する需要は日々増す一方です。ところで、九月中旬に始まったソウルオリンピックも間もなくフィナーレを迎えます。スポーツがそうであるように、文化についてもまた、頂点のレベルを高めることと、裾野を広げることが二つの重要な施策の柱となっています。芸術祭が前者の例となつて、国民文化祭は後者の例と言えるでしょう。

十月一日、芸術祭はNHK交響楽団による「オーケストラへの誘い」で幕を開けます。頂点を極めた高度な芸術は、そこで発表の場を得るのです。芸術の秋、単に喧騒からの脱皮ということではなく、もっと積極的に芸術に触れてみたい気がします。(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(〇三)二六八一(二四一)代表)

「文化庁月報」十月号

(通巻第二四二号)

昭和63年10月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千原東京都新宿区西五軒町52番地

電話(〇三)二六八一(二四一)代表)

振替口座 東京 九十一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定 価 一八〇円(送料四五百円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)